

天才について

徳山 中村 和行

「(随筆は)知識を書き残すことではなく、意見を吐露することでもなく、叡智を人情の乳に溶かして滴らせることである。争うためではなく、仲良くするためである」と福原麟太郎は述べています。彼は、トマス・グレイの研究で知られた英文学者であり、1960年に『トマス・グレイの英詩研究』で東京教育大学から文学博士号を授与され、1963年に「英文学を基礎とする随筆一般」の活動に対して日本芸術院賞を受賞し、1968年には文化功労者となっています。詳しくは、「Wikipedia 福原麟太郎」をご参照下さい。

さて、麟太郎の随筆集『天才について』は1972年5月に毎日新聞社から発行されています。その本を借りようと土曜日の午後に病院勤務を終えて徳山駅前の周南市立駅前図書館に立ち寄ったところ、蔵書がなく、山口県内の連携図書館から借りることにしました。生憎1972年の初版は絶版になっており、1990年11月に現代日本のエッセイのシリーズで講談社文芸文庫から発行されたものを借りることができるということで、早速お願いしました。一週間後に仕事を終えて帰宅すると、家内から「周南市立駅前図書館から電話があり、資料が宇部市立図書館から届いたということでしたよ。何を始めたのですか。」と訊かれ、事の次第を述べる羽目になりました。

麟太郎は、随筆「天才について」の中で石川啄木を例に挙げて「天才というものは得て現実の生活が下手で、そばにいる者にとって決して頼もしい隣人ではない」と述べています。「若き啄木」という芝居の立稽古を見に行った折に、金田一京介も見に来ており、この始末に負えない生活失敗者をよく世話したものだ、つくづくその後姿を眺めていたと述懐しています。また、麟太郎は英

文学の天才の名を挙げ、彼らの所業から「いかなる時代に於いても天才は友とすべからずということになりそうだと、唯一人良い友達として友にできるのはシェイクスピアではないかと思う。」と述べています。その理由に、「八つ年上の女房にくっつかれて逃げ出すなども面白い、もっとも逃げ出したかどうか、いかなることもはっきりわからず、然し想像することはできる。役者をしたというけれども、とても勘平をやったのではない、ちょっと下端役、なに幽霊の役が足りない、よし俺が出てやろうといった調子で、そしていつの間にか地球座の株主になって、たんまり金を溜めるなどは最もあやかりたい。いうことはみんな芝居のセリフにしてしまって、己の言葉というものは残さない、女はどうも不実でいかん、『尼寺へゆきやれ、尼寺へ』とやってのける、なに不平を言うな、人生は舞台の如きものだ、『出がある、ひっこみがある。』などと痛癪球を破裂させている、そしてその日常は、極々平気な顔をして、夕方になると、いつもの人魚軒へやってきて、エールを並々注いで来るおかみさんに愛想よくたいそうな入りだそうですねとお世辞をいわれて、いや女王様のごひいきのお蔭でねと、そう恐縮もしないで頭をひょいと下げて見せているところへ、僕も入って行って、やあ今晚は、などという間柄になってみたい。」と書いています。このくだりは実に面白い。

随筆「天才について」の文中にある勘平とは、赤穂浪士の討ち入り事件を題材にした歌舞伎の仮名手本忠臣蔵に出てくる塩冶家譜代の家臣の早の勘平重氏です。勘平は、おかる（塩冶判官の正室の顔世御膳の腰元）と逢引をしていたため、主君の大事に立ち会えず、屋敷にも戻れず、切腹をしようとはしますが、おかるに止められ、おかるの実

家に落ち延びるのでした。おかると夫婦となった勘平は貧しいながらも猟師として生計をたてていました。数か月後に塩冶判官の家臣の千崎弥五郎から主君の仇討の噂を聞いた勘平は、せめて討ち入りのための資金を拠出しようと義父の与市兵衛に頼み込みます。与市兵衛は、おかるが祇園の花街の遊女として身を売って用立てた 50 両を懐に家路を急ぎますが、その途中に山賊の斧定九郎に財布ごと奪われ、殺されてしまいます。そこに雨夜の暗がりイノシシを追っていた勘平が撃った銃弾が定九郎の胸を打ち抜きます。動転した勘平は倒れた男を介抱しようとしたのですが、大金の入った財布に気づき、相手を確認もせず、財布を持ち去ります。翌日に帰宅した勘平は、自分のためにおかるが身を売ったことを初めて知ります。勘平が与市兵衛の血の付いた財布をもっているのを目にして、姑おかやから舅殺しと責めたてられます。勘平が差し出した金 50 両は塩冶家国家老の大星由良助に不忠不義の家臣から受け取れないとされ、返しに来た弥五郎も、舅殺しの勘平にあきれて立ち去ろうとします。しかし、勘平は苦しい胸の内を語ると、自分の腹に刀を突き立てます。苦衷の告白に心を動かされた弥五郎は与市兵衛の死骸を調べると、傷口は刀でえぐられたもので勘平の仕業ではないとわかります。また、定九郎の死骸からは勘平が撃った銃弾によるものと判ります。舅の与市兵衛を殺したのは定九郎で勘平はその仇を討ったことが明らかになりました。行き違いから勘平は死ぬことになるのですが、それが忠義とみなされて、仇討の仲間にならざるを得なくなったのです。その下りが、芝居の五段目山崎街道鉄砲渡し・山崎街道二つ玉と六段目与市兵衛内勘平切腹で演じられます（歌舞伎演目案内 仮名手本忠臣蔵 Kabuki on the web 公式ホームページをご参照下さい）。

続く七段目の一力茶屋では、由良助が敵の目を欺くために京都祇園の一力茶屋で遊興の限りを尽くしていましたが、そこに由良助の息子の大星力弥から密書が届きます。敵側に寝返った斧九太夫は、由良助の本心を探ろうとして密書の内容を確かめようと床下に隠れます。さて、お茶屋の遊女となったおかるが密書を覗き込んだことを知った由良助

は、おかるを身請けして自由の身にしてやると伝えます。おかるは喜びましたが、兄の平右衛門は、由良助の真意がおかるの口封じであると気付きます。そして平右衛門は、仇討に参加するための手柄としておかるに自分の手にかかって死んでくれと頼みます。平右衛門から父与市兵衛と夫勘平の最後を知ったおかるが自ら命を差し出そうとしたその時、兄妹のこころを見届けた由良助が、止めて入って平右衛門の仇討への参加を許します。そしておかるに刀を持たせ、手を添えて床下で潜んでいた九太夫を刺殺させます。亡き勘平の代わりに功を立てさせたのです。この七段目は芝居の中でも最も人気が高く、上演回数が多いとのこと。ちなみに仮名手本忠臣蔵は、二代目武田出雲・三好松洛・並木千柳の合作で、1748 年 8 月に大阪竹本座で初演されました。仮名手本とは、赤穂四十七士を仮名の四十七文字になぞらえたものです。忠臣蔵の仇討は、武士の手本として当時の社会に受け入れられました。しかし、ご法度である討ち入りを果たして本懐を遂げた四十七士は、江戸幕府の命で切腹処分となります。悲劇の要素は読む者や見る者の共感を呼びます。

福原麟太郎が良い友達になりたいといったウィリアム・シェイクスピアは、英国で有名な劇作家で英文学の基礎を創った天才です。四大悲劇の『ハムレット』『リア王』『オセロ』『マクベス』は殊に有名です。

日本で有名な劇作家である近松門左衛門は、日本の人形浄瑠璃や歌舞伎の基礎を創った天才です。良い友達になりそうです。曾我兄弟の仇討ちの後日談を描いた『世継曾我』は近松の作と言われています。特に世話物と呼ばれる作品は町人社会の義理や人情を主題にしたもので、『曾根崎心中』『冥途の飛脚』『国性爺合戦』『心中天網島』が代表作です。江戸幕府は心中物の上演を一切禁止していたため、近松の浄瑠璃を捉えるのは近代以後の風潮に過ぎないとする向きもありますが、この天才について「叡智を人情の乳に溶かしてしたたらせる」題材としてとらえることは面白い試みです。